



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 17

2010年1月号



はじめに

ニューズレター本号は3編の論考を掲載しています。

西秋良宏氏の「青銅器時代ユーフラテス河中流域の集団関係－国際シンポジウム『Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria』を終えて」は、本研究領域の総括班が昨年11月21日から23日の3日間開催したシンポジウムの様子を簡潔にまとめています。西秋氏も述べているように、本研究領域研究メンバー(14発表)と海外招待研究者(11発表)の都合25にのぼる発表と討論を内容としたこのシンポジウムは成功のうちに終了し、今後の研究のあり方に大きな示唆を与えました。

久米正吾氏の「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査(II)」は、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群における連続調査の成果の最新情報です。「墓の証拠から当時の集団構造の形成過程を復元する」ことを目的としたこの一連の調査が極めて重要な成果をもたらしたことがわかります。昨年の5月から6月の第9次現地調査で実施したテル・シャップート1号丘のケルン墓および同2号丘の発掘調査、そして、昨年10月の第11次現地調査で実施したワディ・ダバ墓地C地点の発掘調査で得られた成果が述べられています。久米氏が述べるように、テル・シャップート墳丘墓直下で出土した前期青銅器時代ケルン墓の存在は、藤井純夫氏たちが調査を推進しているビシュリ山麓中期青銅器時代のケルン墓群の考察に際して極めて重要です。また、ワディ・ダバ墓地C地点の墓室で出土した完形土器は、同墓地群とガーネム・アル・アリ遺跡などユーフラテス河流域村落遺跡群との関係を考えるために極めて重要な資料であるだけでなく、ユーフラテス河流域とビシュリ砂漠台地のあいだで継起した人間集団の動きを考察するためにも重要な情報です。

堀岡晴美氏は「都市マルトゥの位置を探る－Tell Thadiyēnはマルトゥ市かアバットゥム市か?」において、「前3千年紀シリアと南メソポタミア間でのmar-tuの移動または往還」と「シリアに実在した都市マルトゥの実際の位置」を探っています。詳細は本論に譲るとして、堀岡氏の豊富な知見に基づく極めて興味深い論考です。

平成22年1月30日
領域代表者 大沼克彦

目次

青銅器時代ユーフラテス河中流域の集団関係 －国際シンポジウム『Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria』を終えて	西秋良宏	1
テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査(II)	久米正吾 沼本宏俊	6
都市マルトゥの位置を探る－Tell Thadiyēnはマルトゥ市かアバットゥム市か?	堀岡晴美	14

表紙	A	A: ワディ・ダバ墓地C地点の墓室から出土した完形土器
	B C	B: ワディ・ダバ墓地C地点のシャフト部
		C: 発掘前のワディ・ダバ墓地C地点

青銅器時代ユーフラテス河中流域の集団関係

－ 国際シンポジウム『Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria』を終えて

西秋良宏（東京大学総合研究博物館）

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」連携研究者（シンポジウム担当）
計画研究「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」研究代表者



図1：国際シンポジウムのポスター



図2：シリア文化大臣リヤド・ナッサン・アガ博士



図3：シリア考古遺産庁長官バッサム・ジャムース博士

はじめに

2009年11月21日から23日まで、東京池袋のサンシャインシティ文化会館を会場として標記の国際シンポジウムが開催された（図1）。本特定領域の総括班が主催したものである。2005年に5年計画で発足した私たちのプロジェクトも残すところ半年を切った。関係分野で見識ある海外の研究者と意見交換しつつ、この間の成果の一部を公表、検討することを目的として企画したシンポジウムである。

本プロジェクト関係者が14本、海外からの招待研究者が11本、総計25本の講演がおこなわれ、全ての講演終了後には総合討論が設けられた。招待講演には、シリア、ビシュリ山系で総計12シーズンも繰り返し行った私たちの野外調査に多大なご尽力をいただいたシリア文化大臣リヤド・ナッサン・アガ博士（図2）とシリア考古遺産庁長官バッサム・ジャムース博士（図3）による記念講演もふくまれる。シンポジウムの構成を簡単に報告し、あわせて討論における主な論点ないし成果に関する私的感想を述べたい。さすがに25本にのぼる講演の詳細を紹介するには紙幅が足りない。それについては会期に合

わせて刊行された50ページを超える予稿集、および近刊予定の講演収録集を参照していただきたい。

シンポジウムの概要

講演は大きく4つのセッションに分けておこなわれた。まず、初日から二日目前半までが「ユーフラテス河中流域、ビシュリ山系の総合的研究」。本領域の主たる成果報告である。大沼克彦、アナス・ハブール両名（敬称略、以下同じ）によるプロジェクト概要紹介の後、星野光雄がユーフラテス河中流域の地質・地形の調査データ、佐藤宏之が部族社会の形成にはいたっていないかと想定される旧石器時代における社会構造にかかわる考古学的証拠を検討した。つ



図4：講演する筑波大学長谷川敦章

いで、本領域による野外調査の中核的成果を述べる報告が続いた。まず、ユーフラテス河中流域低地の拠点遺跡の一つと目される前期青銅器時代ガーネム・アル＝アリの調査については、長谷川敦章(図4)が発掘結果と土器編年、本郷一美が出土した動植物遺存体の概要を述べた。一方、台地上にある諸遺跡については、西秋が踏査の成果とそれにもとづく青銅器時代集団関係の考察、久米正吾がガーネム・アル＝アリ遺跡直近に密に分布している前期青銅器時代墓群の型式学的分析結果を報じた。また、藤井純夫は、さらに内陸のビシュリ山系に位置する中期青銅器時代のケルン墓群を踏査、発掘して得た成果、中野良彦はそこから出土した人骨から生活形態を推察した結果を述べた。中村俊夫はガーネム・アル＝アリ、ケルン墓群双方から得た炭化物の年代測定結果を報告した。これらに加えて、同地域の現代集団を調べて青銅器時代社会を推察する報告も2本あった。常木晃が述べたのは現在のガーネム・アル＝アリ村住人が造営した墓地群と被葬者の血縁関係を調べた民族考古学的調査成果、赤堀雅幸が報告したのは現代部族の構成や歴史について調べた文化人類学的聞き取り調査の結果である。

第二のセッションは「シリアの青銅器時代遺跡」と題するもので、シリアで実施されている最近の青銅器時代遺跡調査の成果が述べられた。当プロジェクトが主眼をおくユーフラテス河中流域の青銅器時代集団関係の解析につき、比較材料を得ることを期したものである。ミシェル・マクディシは前期から中期青銅器時代における円形囲壁集落の出現経緯の研究をとおしてシリアの東西で集団の動きが読み取れることを述べた。アハメッド・スルタンとミーナ・レンキヴィストは我々の調査地近辺で彼女らがおこなった調査成果を報じた。スルタンはユーフラテス河中流域で最近見つかった青銅器時代未盗掘墓の構造や副葬品の構成、レンキヴィストはビシュリ山系東部における遺跡分布調査の結果、そこで見つかったケルン墓や墓型式の多様性が部族を示す可能性などについて述べた。また、ハーヴェイ・ワイズは前2200年から1900年頃、すなわち前期青銅器時代末に起こった極端な気候乾燥化がシリア内陸部では遺跡の放棄につながったことをレイラン遺跡での知見をもとに述べた。

二日目の午後に開かれた続くセッションでは、「都市民と遊牧民の関係、部族社会の歴史」を「考古学的証拠」から検討する講演がならんだ。エリザベス・クーパーはユーフラテス河中流域の青銅器時代諸都市が北メソポタミアやレヴァント地方と比してきわめて小さいことに着目し、乾燥地帯ならでの、肥沃な地方よりも強固であった部族性が政治権力の発達をこぼんだ可能性について言及した。ベルトホルト・アインヴァルグも、自身が調査したユー

フラテス河中流域のテル・バージでの知見をもとに、そのような傾向が後期青銅器時代にあっても続いていた可能性を指摘した。一方、ヤン・マイヤーは北メソポタミアの西縁、シリア東北部テル・フエラにおける青銅器時代の都市構造、そのパタンがユーフラテス河中流域へ波及したプロセスなどについて言及した。

そして、最終日である三日目は、「楔形文書史料から見た都市民と遊牧民の関係」に関する講演がそろった。前川和也は前3千年紀末の南メソポタミア、山田重郎は前2千年紀前半の北メソポタミアにおける統治、社会構造を扱ったが、残りの3本の講演はユーフラテス河中流域前2千年紀の大都市、マリの文書について述べるものであった。中田一郎は農耕民と遊牧民の対立をおさめる政治的仕組みがあったことを指摘し、一方、ドミニク・シャルパンとジャン＝マリー・デュランはビシュリ山系に展開していた集団について直接的な言及をおこなった。すなわち、シャルパンはビシュリ山系にいたのはスートと呼ばれる遊牧民であり楔形文書を通じて彼らの生活社会を知ることができること、デュランはビシュリ西部のユーフラテス河流域はスートら遊牧民が利用する地域であって当時都市がなく、都市民にとっては危険地帯であったことなどを述べた。

シンポジウムの主たる論点

以上でわかるように、今回のシンポジウムは、最初に本領域の野外調査の成果を提示し、その後、それを多方面の証拠を使って検討するための材料を関連研究者から提供してもらうことを目論んで設計された。言うまでもなく、本特定領域の核となるのはユーフラテス河中流域青銅器時代の総合的研究にある。それを通じて、前3千年紀には出現していたとされる遊牧部族の社会を考察し、部族社会の源流をさぐるようとしている。したがって、講演終了後に実施した総合討論での中心的な関心は、本領域緒計画研究班がユーフラテス河中流低地の集落、ビシュリ台地、ビシュリ山の調査で得た成果をどう歴史的枠組みに位置づけるかであった(図5、6)。議論したのは、それらの編年的関係、河川低地集落と台地墓群の関係、さらにはビシュリ山のケルン墓群が意味するものについてである。

まず、編年的関係について。出土した土器(長谷川)や放射性炭素年代(中村)にもとづけば、ガーネム・アル＝アリなど低地集落の主たる居住時期が前3千年紀中葉、前期青銅器時代ⅢからⅣa期であったことは間違いない。植物遺存体の分析は、住人がムギを中心とした植物栽培を実施していた農耕村落であることを示している(本郷)。この集落はⅣb期、すなわち前2300年頃には



図5：総合討論の司会。左から藤井純夫、大沼克彦、ミシェル・マクディシ



図6：会場風景

放棄され、中期青銅器時代には墓地として利用されていたらしい(長谷川)。

一方、台地上での試掘(久米)や踏査(西秋)によればガーネム・アル=アリなど低地集落には、各々その2-3キロ圏内に大量の墓やキャンプ地が設けられていたことが明らかにされている。いずれもガーネム・アル=アリと同時期のものである。また、中期青銅器時代の集落は低地には見あたらないが、台地縁辺には一箇所あるらしいことも判明している(西秋)。さらに、30キロ以上内陸に位置するビシュリ山の踏査・試掘は、前2千年紀の前半(中村)、中期青銅器時代のケルン墓が濃密に分布していたことを示している(藤井)。前期青銅器時代の墓は見つかっていない。

これらの編年的関係を単純に考えると、前期青銅器時代の末頃、ユーフラテス河中流域の集団が遊牧化して集落を放棄し、中期青銅器時代には内陸遊牧民としてビシュリ山を聖地化したということになる。このことは、2009年1月におこなった第5回シンポジウムの総合討論でも推察されたことである(拙稿、本誌14号)。集落の放棄が、前2200年から1900年頃まで続いた乾燥気候(ワイス)を契機としたと考えるとつじつまが合うように見える。だが、事情はそう簡単ではない。

河川低地の前期青銅器時代集団と内陸ビシュリ山の中期青銅器時代集団との間の連続性がはっきりしていないのである。マクディシによれば、前3千年紀以降の集落形態をみると、ユーフラテス河中流域をふくむシリア東北部では円形囲壁集落が前3千年紀前半に出現し、それが後半にはシリア西部に波及する。逆に前2千年紀始めにはシリア西部の集落が崩壊し、今度は東への集団移動が示唆されるという。ビシュリの中期青銅器時代ケルン墓造営者たちは西のレヴァント地方からやってきたのであって、ユーフラテス河中流域ではないという考えである。スート人であったということになる(シャルパン)。総合討

論では結論をみななかったが、この問題を考える上で重要なのは、河川低地とビシュリ山の間位置する台地には前期青銅器時代に既にケルン墓群が営まれていたことである(西秋)。ビシュリ山のケルンが中期青銅器時代であるのに対し、それらは前期青銅器時代なのである。造営したのがビシュリ山ケルン墓造営者たちの祖先であれば上記のシナリオが補強されるが、別物であるのなら西からの移動を含めた別の説明が必要になる。いずれにしても、確認するにはその発掘調査が不可欠ということになる。

第二の議題は、台地縁辺部にある墓群がガーネム・アル=アリ集落の墓地であったかどうかという点である。これは、前期青銅器時代における集団関係の構造や成立を知る上で欠かせない問題であるが、結論に至らなかった。久米や筆者は肯定的な意見を述べたが、かつてガーネム・アル=アリ近郊の台地上墓群、アブ・ハマド遺跡を発掘したマイヤーは違うと言う。彼は、構造の特異性や数から見て台地の墓群は遊牧民の所産であり、低地住民の墓は低地のどこかに埋もれていて未発見ののだと主張する。また、台地墓群と低地集落が地理的に近接するのは遊牧民と農民が契約を結んでいたためではないかと説明する。実は、この問題は2009年の5月にシリアでマイヤーと筆者が議論したがお互い納得せず、続きは東京のシンポジウムでということの流れであった。今回のシンポジウムでも議論が展開されたが、もっと議論が白熱したのは、シンポジウム終了翌日の24日、古代オリエント博物館におけるマイヤー講演会後の討論においてである。

筆者にはマイヤーが言う農耕民の墓地が今後、低地で見つかるとは思えない。台地の墓域は実際には、台地だけでなく低地の集落近くにまで連続しているのである。しかも、台地奥と集落近郊の墓とで構造に違いはみられない(久米)。また、同時期の台地上には大規模なケル

International Symposium

Formation of Tribal Communities - Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria**Date:** November 21- 23, 2009**Place:** Grand Hall, 7th Floor of Sunshine-City Bunka-Kaikan, 3-1-4 Higashi-Ikebukuro, Toshima-Ku, Tokyo, Japan**Organizing committee:** Supervising team of the Research Project "Formation of Tribal Communities in the Bishri Mountains, Middle Euphrates" (Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Area (2005-2009), the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan)**Subsidizing organization:** The Japan Foundation**■ 1st Day: November 21 (Saturday)**Morning

9:00-10:00 Registration

Chairperson: Katsuhiko Ohnuma

10:05-10:25 "Syria-Japan Cultural Cooperation: Past, Present and Future" Riad Nassan Agha (Minister of Culture, Syria)

10:30-11:00 "Archaeological Works in Syria Today" Bassam Jamous (Director General, Directorate General of Antiquities and Museums, Syria)

11:00-11:10 *Break***Section 1 [Integrated Research in the Bishri Region, the Middle Euphrates]**

Chairperson: Yoshihiro Nishiaki

11:10-11:40 "Integrated Research in the Bishri Region" Katsuhiko Ohnuma (Professor, Kokushikan University, Japan) and Anas Al-Khabour (Directorate General of Antiquities and Museums, Syria)

11:40-12:10 "Geological and Chronological Study in the Bishri Region" Mitsuo Hoshino (Professor *emeritus*, Nagoya University, Japan) *et al.*12:10-13:10 *Lunch*Afternoon

13:10-13:40 "Social Complexity and Organization in Paleolithic of Eurasia" Hiroyuki Sato (Professor, University of Tokyo, Japan)

13:40-14:10 "Sondage at the Site of Tell Ghanem Al-Ali" Atsunori Hasegawa (Ph.D. Student, University of Tsukuba, Japan)

14:10-14:25 *Break*

Chairperson: Saeko Miyashita

14:25-14:55 "Archaeological Surveys of Bronze Age and Earlier Settlements around Tell Ghanem al-Ali" Yoshihiro Nishiaki (Professor, University of Tokyo, Japan)

14:55-15:25 "Surveys and Sondage at the Grave Complexes near the Site of Tell Ghanem al-'Ali" Hirotoishi Numoto (Professor, Kokushikan University, Japan) and Shogo Kume (Research Fellow, Kokushikan University, Japan)

15:25-15:40 *Break*

15:40-16:10 "Archaeological Investigations of Bronze Age Cairn Fields on the North-western Flank of Mt. Bishri" Sumio Fujii (Professor, Kanazawa University, Japan) and Takuro Adachi (Middle Eastern Culture Center, Japan)

16:10-16:40 "Ethno-Archaeological Research on the Modern Cemeteries of Ghanem al-Ali Village" Akira Tsuneki (Professor, University of Tsukuba, Japan)

16:40-16:55 *Break*

Chairperson: Sumio Fujii

16:55-17:25 "Zooarchaeology and Ethnoarchaeobotany at Tell Ghanem Al-Ali" Hitomi Hongo (Associate Professor, Graduate University for Advanced Studies, Japan)

17:25-17:55 "Human Remains from the Bronze Age Sites in Bishri Region" Yoshihiko Nakano (Associate professor, Osaka University, Japan) and Hidemi Ishida (Professor, University of Shiga Prefecture, Japan)

■ 2nd Day: November 22 (Sunday)Morning

Chairperson: Akira Tsuneki

10:00-10:30 "Preliminary Anthropological Survey in the Villages in the Area around Tell Ghanem al-Ali and Wadi al-Rahum" Masayuki Akahori (Professor, Sophia University, Japan)

Section 2 [Bronze Age Sites of Syria]

10:30-11:00 "The Early Bronze Age Chronology based on 14C Ages of Charcoal Remains from Tell Ghanem al-Ali" Toshio Nakamura (Professor, Nagoya University, Japan)

11:00-11:15 *Break*

11:15-11:45 "Urban Planning in Syria during the Second Urban Revolution (Mid-third Millennium BC)" Michel Al-Maqdissi (Director of Excavations and Research, Directorate General of Antiquities and Museums, Syria)

11:45-12:15 "Bronze Age Sites around Al-Raqa" Ahmad Sultan (Directorate General of Antiquities and Museums, Syria)

12:15-13:15 *Lunch*Afternoon

Chairperson: Katsuhiko Ohnuma

13:15-13:45 "Tracing Tribal Implications among the Bronze Age Tomb Types in the Region of Jebel Bishri in Syria" Minna Lönnqvist (Adj. Professor, Universities of Helsinki and Oulu, Finland)

13:45-14:15 "Abrupt Climate and Social Change 4.2-3.9 kaBP at the Riparian and Karst Aquifer Refugia of Syria" Harvey Weiss (Professor, Yale University, U.S.A.)

14:15-14:30 *Break***Section 3 [History of Tribal Communities in Syria: Citizens and Nomads Viewed from Archaeological Sites]**

Chairperson: Hiroyuki Sato

14:30-15:00 "Urban Elements in Early Bronze Age Settlements of the Middle Eu-

phrates" Elisabeth N. Cooper (Associate Professor, University of British Columbia, Canada)

15:00-15:30 "Social Structures and Interaction at Tall Bazi and the Middle Euphrates" Berthold Einwag (Institut für Vorderasiatische Archäologie der Ludwig-Maximilians-Universität, Germany)

15:30-15:45 *Break*

15:45-16:15 "Tribal and State: The Change of Settlements and Settlement Pattern in Upper Mesopotamia during the 3rd and 2nd Millennium B.C.: A Re-Evaluation" Jan-Waalke Meyer (Professor, Goethe-University, Frankfurt, Germany)

18:00-20:00 *Welcome Party* Greeting speech: Jean-Marie Durand**■ 3rd Day: November 23 (Monday)**Morning**Section 4 [History of Tribal Communities in Syria: Citizens and Nomads Viewed from Philological Evidences]**

Chairperson: Shigeo Yamada

10:00-10:30 "Rod and Ring": Insignias of Foreign Rule in the Ur III - OB Periods" Kazuya Maekawa (Professor, Kokushikan University, Japan)

10:30-11:00 "Nomads and Farmers in the Orbit of Mari Kingdom in the 18th Century (B.C.E.) Syria: A Few Observations on *Merhûm*-officials and their Roles" Ichiro Nakata (Professor *Emeritus*, Chuo University, Japan)11:00-11:15 *Break*

11:15-11:45 "The Desert Routes across the Djebel Bishri and the Sutean Nomads according to the Mari Archives" Dominique Charpin (Professor, Sorbonne University, France)

11:45-12:45 *Lunch*Afternoon

Chairperson: Kazuya Maekawa

12:45-13:15 "Amorite Societies along the Lower Habur according to the Tell Taban Tablets" Shigeo Yamada (Professor, University of Tsukuba, Japan)

13:15-13:45 "Between Djebel Bishri and Euphrates River: Nomads and Settled People" Jean-Marie Durand (Professor, Collège de France, France)

13:45-14:00 *Break***Section 5 [Comprehensive Discussion]**

14:00-16:00 Chairpersons: Katsuhiko Ohnuma and Michel Al-Maqdissi

16:00 Closing

ン墓が既に存在していたという点がひっかかる。ケルン墓が遊牧民の所産という点はみな了解している。アブ・ハマドなど普通の墓群も遊牧民のものであれば、その違いをどう説明すればよいのか。議論が続いた末、筆者が述べた（折衷）案は、台地上の墓群には遊牧民の墓も低地民の墓も含まれているという考えである。クーパーが可能性を示唆したように、ユーフラテス中流域においては同じ部族に属する農耕民と遊牧民がゆるやかなフェデレーションを作っていたのであれば、あり得ないことではないと思われる。

いささかローカル、かつ、私的興味に引きつけすぎた話題と受け止められる方がおられるかも知れないが、この問題は、さらに調査を進め、明らかにする価値が十分にある。このように具体的な事例でもって遊牧民、農耕民の関係を議論する材料が得られたことは西アジアの前期青銅器時代考古学において初めてのことだからである。また、そのような証拠が銅器時代ではなく前期青銅器時代に出現したということ自体が大変、示唆的なものであって、それを示しただけでも部族社会の形成研究という点で重要な貢献であろうと思う。

さて、第三の議論はビシュリ山系のケルン墓についてのものであった。藤井らによるビシュリ山発掘は、そこで無数に見つかるケルン墓群が中期青銅器時代、マリ文書の時代のものであることを明らかにした。歴史学に不案内な筆者にはシャルパンやデュランが言うようにスートの所産かどうかは判断できない。文書史料によれば当時、複数の集団がいたこともわかっているというからなおさらである。しかし、ケルン墓の考古学資料と、マリ文書史料の詳細な突き合わせがすすめばきわめて興味深い成果が出ることは必定である。既発掘の墓が文書に固有名詞で

現れる部族集団の墓であった可能性すらあるし、その構造や副葬品から文書史料に描かれたビシュリ遊牧民の実状を点検することもできよう。これは、部族社会の形成というよりは、形成後の部族の性質や集団構造についての研究になるが、そこで対応をつかめれば文書史料がない前期青銅器時代の遺跡にまでさかのぼって内陸遊牧民の様態を追求できる可能性が生まれよう。それを追求していくには、ここでもやはり、台地縁辺部にある前期青銅器時代ケルン墓の調査が不可欠ということになる。

おわりに

三日間、およびその後の議論を振り返ってみると、部族社会形成研究への寄与という点で当プロジェクトは相応の成果をなしたのではないと思われる。前回（西秋、本誌14号）、前々回（西秋、本誌10号）の国内シンポジウムの記録と比べてみても、この間、プロジェクトが着実に進展したことは明らかである。もちろん、ここにも述べたように個別には未解決な側面が多々あるし、課題によっては探索が緒についたばかりのものも含まれる。プロジェクト最終年度ではあるが、それらについては総括班が見通しをとりまとめる必要がある。また、今回のシンポジウムは5年間の成果総括の一部であると先に書いた。このシンポジウムで全ての計画研究班の成果が披瀝されたわけではない。総括班には、それらを含めた総括という仕事も残っている。

なお、本シンポジウム開催にあたっては、特定領域研究にかかわる科学研究費に加えて、国際交流基金知的交流会議助成プログラムの助成を受けた（申請責任者：大沼克彦）。記して、お礼申し上げる次第である。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の 前期青銅器時代墳墓群の調査 (Ⅱ)

久米正吾 (国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員)

計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」連携研究者

沼本宏俊 (国士舘大学体育学部)

計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」研究代表者

はじめに

「セム系部族社会」プロジェクトの一環として2008年度から開始されたテル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査は、本年度第3次・第4次の現地調査が実施された。この墳墓群の調査で目的としてきたことは、プロジェクト全体の目標に沿って、墓の証拠から当時の集団構造の形成過程を復元することである。昨年度までは、調査地を主に踏査することによって、墓の形態を記録し、墓地の全体像を短時間で把握する作業に重点を置いてきた(久米・沼本 2009a, b, 印刷中; Numoto and Kume 2009a, b)。その理由は2009年度で終了となるプロジェクトのスケジュールを考慮した点が大き。昨年度の調査では、調査した墳墓群が異なる墓形態の組み合わせと個別の立地特性を有する4つの類型に分かれることが示された。この結果に基づき、その4類型が形成された背景には、墳墓群形成の時間的推移、出自を軸とする集団構造、新たな集団の流入の可能性、階層の変異、等が反映されていることを仮説として論じた(久米 印刷

中; Numoto and Kume in press)。

この仮説は盗掘墓という損傷の激しいデータに基づいた議論であるため、保存状態の良い墓の証拠に基づいて検証される必要がある。その手始めとして、2009年度は特徴的な盗掘墓及び未盗掘墓発見の可能性が高い地点での試掘調査を実施し、より良好な埋葬に関するデータを集めることを目指した。対象としたのは、テル・シャブート (Tell Shaboot) と呼ばれる墳丘墓群とこれまで調査を行ってこなかったワディ・ダバ (Wadi Daba) 墓地である (図1)。

第3次調査 (2009年4月～5月)

2009年春に実施された第3次調査ではテル・シャブート墳丘墓群の試掘調査を実施した。この墳丘墓群は2基の円墳で構成されており、ビシュリ台地の先端に位置している (図2)。北側の1号丘は径約15m、高さ約3mを測る。一方、南側の2号丘は、径約



図1：調査遺跡の位置 (衛星画像は Google Earth による。一部高解像度の Quickbird により補完)。



図2：試掘前のテル・シャブート1・2号丘。

10m、高さ約1mである。いずれの墳丘墓も盗掘を受けており、1号丘で5箇所、2号丘では少なくとも2箇所の盗掘が確認できた。発掘手法としては、墳丘の堆積を確認するために2m幅の試掘坑を設けて地山面まで掘り下げ、同時に主体部をはじめとする他の遺構を確認するために拡張した。

(1) テル・シャップート1号丘

1号丘の試掘坑でまず明らかになったことは、この墳丘の人工的堆積が実際は1m程で、約2mの自然丘の上に造営されていたことである。その自然丘の頂部には石膏の岩盤が露出していた。さらに、墳丘は積み石によるケルン墓と土盛りによる墳丘墓の2つの堆積層に分割されることが判明した。

墳丘部直下に確認されたケルン墓は、おそらく後の墳丘を構築する際に激しく破壊されており、残存状況は極めて悪かった。このため構造を全て復元することは難しいが、主体部、環状石列、ケルン部の少なくとも3つの構成要素で成り立っていたようである(図3)。



図3：テル・シャップート1号丘墳丘部直下に確認されたケルン墓（北より）。

まず、主体部は約4.5×2.5mを測る。軸はおよそ南北方向で、テル・ガーネム・アル・アリに向かってまっすぐ延びている。約70cm程残存していた主体部の壁は、サイズの異なる石膏の平石を6～7段積んで造られている。主体部床面に葺石はなかったが、露出した石膏岩盤が堅牢な床面の役割を果たしていたのかも知れない(図4)。主体部の北側には、主体部よりやや



図4：1号丘ケルン墓主体部。残存状況は良くないが石壁を持つ地上式の矩形構造物が確認された。写真手前に波打つように見える部分が自然丘頂部に露出する石膏岩盤（南より）。

長軸が長く、幅約40cmの狭い矩形の奥室が設けられていたようで、主体部全体のプランはT字形を呈する(図5)。明確に残っていたわけではないが、奥室



図5：1号丘主体部の上部構造をほぼ除去した状態。写真右側に奥室の壁の痕跡と環状石列（内側）の痕跡が見える（東より）。

周辺に散乱していた大型の石膏平石は、この部屋の蓋石であったかも知れない。この主体部には二つの環状石列が巡っており、内側の石列は径7m程で、主体部石壁と同様の技術で石膏平石を3～4段積んである。外側の石列はこのケルン墓の外縁部を示し、径9m程であったと想定されるが、ごく一部しか残存していなかった。最後に、この外側の石列を範囲として、小レキを多量に含む灰褐色土と、少なくとも2～3層からなる石膏の積み石とで構成されるケルン部がある。最も良好に残存していた南西部では、ケルン部の堆積は70cm程であった。

一方、土盛りによる墳丘は、このケルン墓と地山にあたる自然丘とを全て被うようにして造営されている。ケルン部の堆積土とはやや異なり、緑色味のある灰褐色土のため、ケルン部との区分はしやすい。堆積の厚さはケルンの残存状況により部分部分で異なるが、厚みが最大となるケルン墓主体部分で約1mあった。この墳丘にかかる埋葬施設は発見されなかったが、これは次節の第2号丘の発掘結果によって類推できるため後述することとしたい。

この2つの時期にまたがる埋葬施設の年代決定は容易でない。古代から現代までの長期にわたって破壊・盗掘が繰り返されており、それ故に採集遺物が極めて少なかったからである。しかし、回収された数は多くないが重要な証拠は、ケルン墓が前期青銅器時代に造営され、後のヘレニズム期からローマ・ビザンツ期に墳丘が構築されたことを示唆する。例えば、前期青銅器時代Ⅲ期からⅣA期に典型的なユーフラテス精製土器片や半球鉢片が主体部から採集されている(図

6)。また同じく前期青銅器時代の所産と考えられる青銅製の短剣1点(図7)が主体部から、装身具1点が



図6:1号丘ケルン墓主体部から出土した前期青銅器時代土器(右:無文半球鉢、左:おそらくユーフラテス赤色帯文土器)。



図7:1号丘ケルン墓主体部から出土した青銅製短剣。

ケルン部で回収されている。最近、西秋(Nishiaki in press)によって定義された青銅器時代に特有なフリント製剥片(いわゆるシャブート式石器)が大量に採集されたこともその証拠の1つとなろうか。さらに、ケルンという墓の形態自体も考慮する必要がある。「セム系部族社会」プロジェクトの一環として、ビシュリ山北麓ではこれまで藤井ら(Fujii and Adachi in press)、によって中期青銅器時代ケルン墓群の大規模な分布・試掘調査が展開されてきたが、それよりさらに北側のビシュリ台地縁辺地帯で前期青銅器時代のケルン墓群が西秋ら(Nishiaki et al. in press)によって発見された。ケルン墓が青銅器時代に特有な墓の形態と主張することはできないにしても、テル・シャブート周辺で青銅器時代のケルン墓の証拠が数多く集まりつつあることは示唆に富む。一方、墳丘部からはヘレニズム期からローマ・ビザンツ期にかけての土器棺片が多量に採集された(図8)。1点ではあるが、同時期



図8:1号丘墳丘部から出土したヘレニズム-ローマ-ビザンツ期の土器棺片。

の所産と推測される青銅製リングも見つかっている。また、この時期の墳丘墓はユーフラテス川をテル・ガーン・アル・アリからやや上流に向かったタブカ水没地区調査で数多く報告されている(例えば、江上ほか編1979; Bounni 1980)。また、詳細については改めて報告したいが、中村(Nakamura 2009)による炭素年代測定も極めて適切な値を得ている。

(2) テル・シャブート2号丘

1号丘と同じく、2号丘も約0.4mの自然の高まりの上に造営されており、墳丘の堆積は約0.6m程であった。その堆積土は1号丘のものと類似する。試掘の結果、2基の埋葬主体が確認された。

まず、墳丘のほぼ中心に位置する地点に地山を掘り込んで造った土坑墓が1基確認された(図9)。その



図9:2号丘の土坑墓。周囲に石列が巡っている。写真奥に土器棺墓が石列を壊して造られているのが見える。

サイズは約2.8m×1.2m、深さ0.6m程を測る。墓の軸はおおよそ南東-北西方向である。土坑の南東端には段が切られる一方、北西端には径0.5m、深さ0.2m程の浅いピットがあった。ピットの詳しい機能については現在不明である。この土坑墓の周囲には、高さ約0.8mの隅丸方形の石壁が巡っていた。この石壁の底

は地山直上にあるため土坑墓と同時期に設けられたことは間違いのないと思われるが、両者の機能的関係についても現在のところ不明である。

次に、墳丘表面の東部に土器棺墓が1基確認された。土器棺のサイズは約2.0m×0.6m、深さ0.3m程、軸の向きはおよそ東西方向である。盗掘による被害がなかったようで、伸展葬の埋葬個体がほぼ完全な状態で見つかった(図10)が、副葬品は全く出土していない。



図10：2号丘の土器棺墓に埋葬されていた男性人骨。ヘレニズム-ローマ・ビザンツ期の人物と思われる。

わずかに墓標のようなものを示すと思われる立石が認められただけである。人骨の分析は中野ら(Nakano and Ishida in press)によって行われており男性であったことが判明している。この土器棺墓は、埋葬主体が確認されなかった1号丘の墳丘期の埋葬を考える上で興味深い。おそらく1号丘の表面にも同様の土器棺墓が存在しており、それが後世の盗掘・攪乱によって失われてしまったという想定が可能だからである。そして、その痕跡が墳丘部から多量に出土した土器棺片と推測される。

さて、2号丘は1号丘にも増して回収された遺物は少ない。このことが年代決定を難しくしているが、土坑墓からは1号丘で出土した土器棺片に類似する標本が数は多くないものの採集されている。また、土器棺墓に副葬品は認められなかったが、土器棺そのものはヘレニズム期からローマ・ビザンツ期に特徴的なものであるため、この2号丘の埋葬主体は全てヘレニズム期からローマ・ビザンツ期の所産と考えられる。なお1号丘同様、中村(Nakamura 2009)による炭素年代測定結果も極めて適切であった。

第4次調査(2009年10月)

2009年秋に実施した第4次調査では、現在のガーンム・アル・アリ村に位置するワディ・ダバ墓地の試掘調査を行った(図1)。この地点では、ビシュリ台

地から村へと流れ込むワディがユーフラテスの段丘面を鋭く削っており、その急峻な斜面に多数の盗掘されたシャフト墓が2007年の予備調査で確認されていた(Tsuneki 2008)。このシャフト墓群はワディ斜面のみならず、さらに段丘斜面にも拡がっていたようだが、近年の宅地造成や道・水路建設によりそのほとんどが失われてしまっている。

調査は試掘地点選定のための踏査から始めた。すでに確認されていたワディ斜面に位置するA及びB地点(図1)は、盗掘による破壊が著しく、多くが近隣住民によりゴミ穴等に再利用されている。一方、段丘斜面の方は開発が進行し、斜面そのものがすでに破壊され、失われている地点が多かった。しかし1ヶ所だけ、斜面が良好に保存され、しかも盗掘坑と思われる落ち込みの跡が複数観察される地点(C地点：図1、11、12)があった。そこで、墓の良好な保存状態が期



図11：発掘前のワディ・ダバ墓地C地点。両端は道路やワディによって切られているが、段丘斜面が良好に保存されている。上の段丘面は現在家屋スペースになっている。



図12：C地点で確認された盗掘跡。オリジナルな斜面が削られているのがわずかにわかる。

待されるこのC地点を今回の調査対象とした。試掘はまず、盗掘坑1基を囲む4×4mのトレンチを設定して掘り下げた。同時に盗掘坑の拡がりを知るための狭い(1×11m)トレンチを主トレンチの西側に付属させて掘り下げた。その狭いトレンチからは複数の

盗掘坑が予想通り確認されたため、西側に主トレンチを拡張した結果、今回は4×10m + 1×5m (45㎡)の範囲を調べることになった(図13)。この範囲には

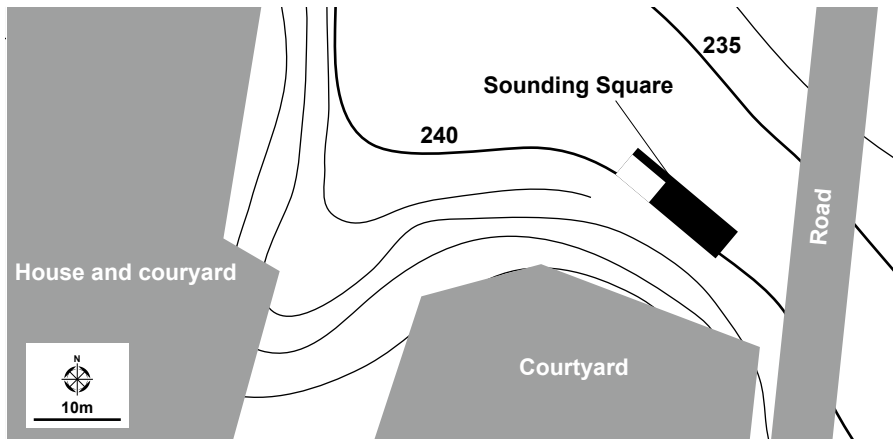


図13：C地点周辺の地形と試掘トレンチの位置。等高線は1m間隔だが、再製に利用したシリア発行の5千分の1地形図に線の欠損があったため、240-235m間には等高線が存在していない。

少なくとも5基のシャフト墓の存在が確認されたが、現場作業は1週間と限られていたため、主トレンチ内で最初に確認された墓1基に調査を絞った。

この墓の入り口は矩形で、約1.2×0.8mを測る。斜面に沿って南西方向にやや傾斜したシャフト部が掘り込まれており、その深さは2.5m程である(図14)。シャフト部からはさらに墓室へと向かう階段が切られており、その高さは約0.8mあった(図15)。階段の最下部は泥レンガを2



図14：シャフト部(北より)。石膏平石により封がなされていた。

つ用いて作られている。このレンガの上にはさらに石膏石が3つ並べて置かれていた。墓室の入り口は、大型の石膏平石を2つ用いて封がなされていたが、これは前期青銅器時代、ユーフラテス川流域のシャフト墓の特徴の1つである(例えば、Wakita et al. 2005)。シャフト部からの遺物はほとんどなかったが、「アル・ハムラ」というシリアの代表的なたばこのパッケージが見つかった。そのデザインは10数年前のものという村人の意見に従えば、盗掘は長く見積もってもこの20年以内に行われたことが推測される。出土した遺物の豊富さからも跡づけられるかも知れない。



図15：シャフト部から墓室へと導く階段。最下段は泥レンガが用いられている。

つ用いて作られている。このレンガの上にはさらに石膏石が3つ並べて置かれていた。墓室の入り口は、大型の石膏平石を2つ用いて封がなされていたが、これは前期青銅器時代、ユーフラテス川流域のシャフト墓の特徴の1つである(例えば、Wakita et al. 2005)。シャフト部からの遺物はほとんどなかったが、「アル・ハムラ」というシリアの代表的なたばこのパッケージが見つかった。そのデザインは10数年前のものという村人の意見に従えば、盗掘は長く見積もってもこの20年以内に行われたことが推測される。出土した遺物の豊富さからも跡づけられるかも知れない。

墓室は楕円形で約2.2×2.8m、高さ1mを測る。墓室の手前側にはシャフト部から漏れ出たと思われる土が堆積していたが、この土を除去すると、奥側に完形、半完形の土器が大量に積まれた状態で発見された(図16)。後に取り上げた際に、完形土器だけで14点あることがわかった(図17)。まだ接合作業が進められていないため正確な土器総数は提示できないが、少なくとも復元できるものだけで30点程ではないかと予想している。完形土器の中にはい

墓室は楕円形で約2.2×2.8m、高さ1mを測る。墓室の手前側にはシャフト部から漏れ出たと思われる土が堆積していたが、この土を除去すると、奥側に完形、半完形の土器が大量に積まれた状態で発見された(図16)。後に取り上げた際に、完形土器だけで14点あることがわかった(図17)。まだ接合作業が進められていないため正確な土器総数は提示できないが、少なくとも復元できるものだけで30点程ではないかと予想している。完形土器の中にはい

大量に積まれた状態で出土した土器。



図16：墓室内に大量に積まれた状態で出土した土器。



図17：出土した完形土器14点。スケールの目盛り幅は20cm。

わゆるユーフラテス黒色帯文土器（Black Euphrates Banded Ware）があり（図 18）、およその年代を紀元前 2450-2300 年頃と定めることができる（Porter 2007）。土器だまりからはさらに、ビーズ（図 19）やペンダント（図 20）、青銅製のピン（図 21）なども出土している。この土器だまりの直下には人骨が集中し



図 18：出土したユーフラテス黒色帯文土器。帯文はミガキによる暗文で施されている。



図 19：ビーズの 1 例。おそらく骨・歯牙等の材質かと思われる。その他、石製やファイアンス製もあった。



図 20：ヤギ・ヒツジと思われる動物を形象したペンダント（孔は胸部に写真上下方向に穿たれている）。図 19 と同じく骨・歯牙の材質か。



図 21：マッシュルーム型の頭部をもつ青銅製のピン。

て出土したが、その残存状況は良くなかった。わずかに墓室の南西端に頭骨の集中部が確認できただけである。人骨の鑑定作業は来シーズン実施する予定であるため、被葬者のより具体的な実像については別の機会に報告する予定である。このように、土器が大量に積まれたり、人骨が解剖学的位置をとどめずに出土する状況は、他のユーフラテス流域の同時代の墓でも確認されている（例えば、テル・スウェイハットやテル・アハマル。Cooper 2006 参照）。これは追葬が行われる度に以前埋葬された人骨や土器等を片づけた跡と考えられている。新たな遺体や副葬品を配置するためのスペースを確保するためである。墓室内には、他の遺跡で報告されているようなベンチやニッチ等の付属施設は認められなかったが、土器・人骨集中地点の下の墓室床面に径 15～20 cm 程の柱穴が 4 つ発見された（図 22）。木製の供物台等が設置された跡かも知れない。



図 22：墓室床面で確認された柱穴。供物台などの跡か。

おわりに

2009 年度の 2 回の調査では、今後の調査展開に向けて大きな前進が認められた。特にテル・シャブート墳丘墓直下に発見された前期青銅器時代のケルン墓は、藤井ら（Fujii and Adachi in press）が調査しているビシュリ山地北麓に広がる中期青銅器時代のケルン墓群との関係性を考える上で興味深い成果と思われる。例えば、前期青銅器時代にはユーフラテス河畔の定住的集団とビシュリ山地の遊牧的集団には明確な区分があって、今回ビシュリ台地の崖際に発見されたケルン墓はその遊牧的集団の痕跡が、河畔の定住的集団の視界にわずかに顔をのぞかせた結果なのだろうか。それとも、前期青銅器時代の定住的集落の人々はそもそも遊牧出自で、中期青銅器時代に入ってその定住的集団がビシュリ山地の乾燥地帯に遊牧化して進出していく様子を示しているのか。プロジェクト内の議論ではこのような様々な仮説が提出されつつある（Ohnuma et al eds. in press 内の諸論文）。

もちろん、このような仮説を実証的に研究していくためには、良質な考古学的データの分析が不可欠だが、ワディ・ダバ墓地での成果はその一部を担うことができるものと思われる。調査地点にはおそらく保存状態の良い墓が多数存在していると目される。来年度以降この地点の調査を継続することによって、埋葬の証拠を数多く集め、プロジェクトが目指すユーフラテス川流域の青銅器時代社会と集団の動態的研究に新たな貢献ができるものと信じている。

謝辞

2009年春の第3次調査では、赤司千恵氏（早稲田大学大学院博士後期課程）、安倍雅史氏（東京文化財研究所特別研究員）、Ruba Deeb氏（ダマスカス大学学生）に現地作業の一部にご協力頂いた。また、足立拓朗氏（中近東文化センター附属博物館研究員）には、出土したビーズ類に関して様々なご教示を賜った。末筆ながら感謝申し上げたい。

引用文献

- Bounni, A. (1980) Les tombes à tumuli du Moyen Euphrate. In J.-C. Margueron (ed.) *Le Moyen Euphrate. Zone de contacts et d'échanges. Actes du colloque de Strasbourg (10-12 mars 1977)*. pp. 315-325. E.J. Brill, Leiden.
- Cooper, L. (2006) *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. Routledge, New York and London.
- Fujii, S. and T. Adachi (in press) Archaeological investigations of Bronze Age cairn fields in the northwestern flank of Mt. Bishri. In K. Ohnuma et al. (eds.) *Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of Ar-Raqqa, Syria, 2009. Al-Rafidan* 31.
- Nakamura, T. (2009) Carbon-14 dating along archaeological succession of Tell Ghanem al-Ali. M. Hoshino (eds.) *Abstracts for international symposium, Geo-environmental research in the Middle Euphrates*. pp. 17-18. Nagoya University, Nagoya. November 26, 2009.
- Nakano, Y. and H. Ishida (in press) Human remains from the Bronze Age sites in Bishri region. In K. Ohnuma et al. (eds.) *Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of Ar-Raqqa, Syria, 2009. Al-Rafidan* 31.

- Nishiaki, Y. (in press) Archaeological surveys of Bronze Age and earlier settlements around Tell Ghanem al-'Ali. In K. Ohnuma et al. (eds.)
- Nishiaki, Y., M. Abe, S. Kadowaki, S. Kume and H. Nakata (in press) Archaeological survey around Tell Ghanem al-'Ali (II). In K. Ohnuma et al. (eds.) *Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of Ar-Raqqa, Syria, 2009. Al-Rafidan* 31.
- Numoto, H. and S. Kume (2009a) Cleaning and survey of the Early Bronze Age hilltop tombs near Tell Ghanem al-'Ali. In K. Ohnuma and A. Al-Khabour (eds.) *Archaeological research in the Bishri region: report of the sixth working season. Al-Rafidan* 30: 172-180.
- Numoto, H. and S. Kume (2009b) Archaeological survey of the Early Bronze Age off-site tombs near Tell Ghanem al-'Ali. In K. Ohnuma and A. Sultan (eds.) *Archaeological research in the Bishri region: report of the seventh working season. Al-Rafidan* 30: 193-198.
- Numoto, H. and S. Kume (in press) Surveys and sondage at the cemeteries near Tell Ghanem al-'Ali. In K. Ohnuma et al. (eds.) *Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of Ar-Raqqa, Syria, 2009. Al-Rafidan* 31.
- Ohnuma, K., S. Fujii, Y. Nishiaki, A. Tsuneki, S. Miyashita and H. Sato (eds.) (in press) *Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*.
- Porter, A. (2007) Ceramic assemblages of the Third Millennium in the Euphrates region. In M. al-Maqdissi, V. Matoian and C. Nicolle (eds.) *Céramique de l'âge du bronze en Syrie, II : L'Euphrate et la région de Jézireh*. pp. 3-21. Institut français du Proche-Orient, Beirut.
- Tsuneki, A. (2008) A short history of Ganam al-Ali village. In K. Ohnuma and A. Al-Khabour (eds.) *Archaeological research in the Bishri*

- region: report of the fourth working season. *Al-Rafidan* 29: 184-190.
- Wakita, S., K. Ishida and H. Wada (2005) A burial in the Middle Euphrates, in Syria. Grave D-No. 21: an Early Bronze Age grave in Area D in Rumeilah. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 25: 1-16.
- 江上波夫・増田精一・岩崎卓也 (編) (1979) 『ルメイラ、ミシヨルファ付近のヘレニズム期の遺跡調査概報 (1974-1978)』古代オリエント博物館.
- 久米正吾 (印刷中) 「シリア、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墓地遺跡における墓群構造」佐藤宏之 (編) 『ガーネム・アリとその周辺』平電子印刷所.
- 久米正吾・沼本宏俊 (2009a) 「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『セム系部族社会の形成 Newsletter』14: 11-19.
- 久米正吾・沼本宏俊 (2009b) 「ユーフラテス川流域の古代墓を探る - シリア、ビシュリ山系ワディ・シャップート墓域の第1次・2次調査 (2008年) -」『平成20年度考古学が語る古代オリエント - 第16回西アジア発掘調査報告会報告集 -』日本西アジア考古学会.
- 久米正吾・沼本宏俊 (印刷中) 「ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」大沼克彦・西秋良宏 (編) 『紀元前3千年紀の西アジア - ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る』六一書房.

都市マルトゥの位置を探る – Tell Thadiyēn はマルトゥ市かアバトゥム市か？

堀岡晴美

計画研究「[シュメール文字文明]の成立と展開」研究協力者

2009年4月におこなわれた「若手研究者成果報告会」で筆者は、前3千年紀シリアに存在した「マルトゥ王国」について、メソポタミア文献資料で言及される mar-tu/MAR.TU とエブラ文書に登場する地名 *mar-tu/tu₃/tum^{ki}* との間の直接的つながりを想定しつつ紹介した。しかしその関連性はいまだ明らかではないとの意見があることも確かである。ここではまず、前3千年紀シリアと南メソポタミア間での mar-tu の移動または往還について簡単に触れ、つづいてシリアに実在した都市マルトゥの実際の位置を探りたい。なお前年の報告ではペッティナート (Pettinato) に倣い「マルトゥ王国」としたが^(注1)、その名称に間違いはないとしても、今回追跡する対象は都市であるため、ここでは「マルトゥ市」とする。

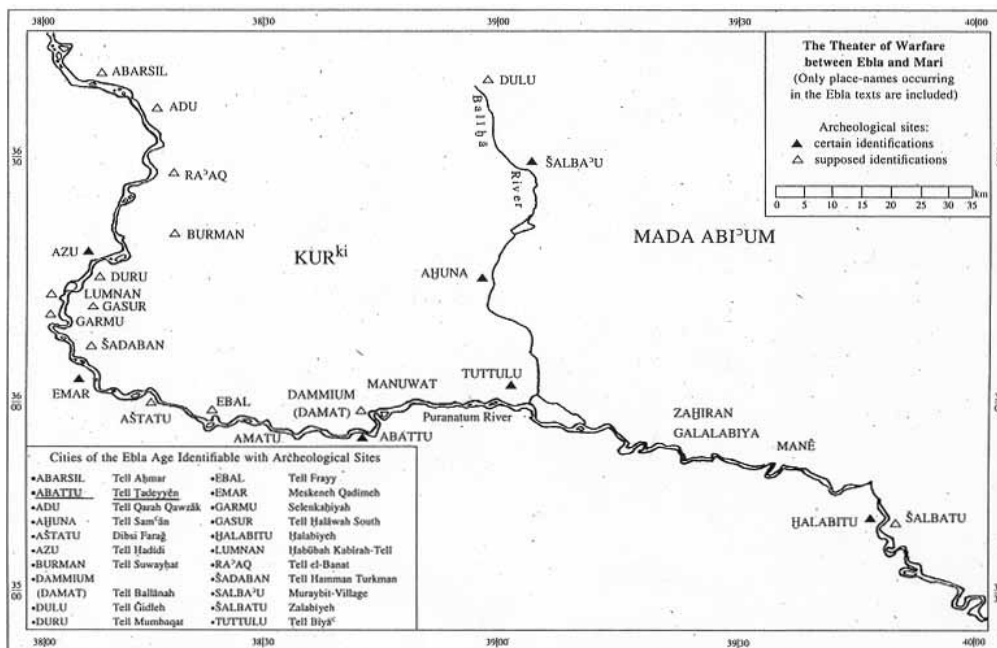
1. ファラとシリアをつなぐマルトゥ

メソポタミア南部において、mar-tu への言及がとくにファラ文書とドゥレーヘム文書に集中するのはなぜだろうか？ これらの文書が出土したファラ (遺跡) は古代都市シュルツパクに隣接した交易の拠点であり^(注2)、ドゥレーヘム (古代名プズリシュ・ダガン) はウル第3王朝期の動物税集積地であった。すなわちこれらの地は外来者がつきつきと訪れる土地柄であり、そのことが、マルトゥが両地に現れる要

因となったと思われる。mar-tu の語が初めて登場するのが前25世紀半ばのファラ文書においてであり、つづいてシリア・イラク国境付近のマリ出土文書であった。したがって、前2千年紀前半に「アムル人王朝」が君臨したマリでは、前3千年紀半ばにはすでにマルトゥが活動していたことは確かで、さらに、ユーフラテス河中流域を支配したマリは河川を利用した交易活動がさかんであったから、下流のファラとも中継地を経て交流があったと推測される。

南メソポタミアのほぼ中央に位置するファラの地に、ウルクは他の主要都市と協力して遠隔地交易事業所と大規模灌漑農耕を営み、それと並行して、各地から集まる交易代理店も、それぞれの耕地を所有し交易事業を展開していた。ファラにマルトゥと呼ばれる人々がいたことは、ファラ型不動産売買文書に見られる「マルトゥの耕地 (aša₅-mar-tu₃(DU))」の名称と、mar-tu の肩書を持つ人物アスアグ (²A₃-su₁₃-ag₃) がいることで明らかなのだが、以下に挙げる理由から、かれらはシリアからの移住者ではないかと推測される。第一に、アスアグは2枚の耕地売買契約文書に証人として記載され、そこで取引された耕地—「エル神の丘 (du₆-E-lum)」と「玄武岩」耕地 (aša₅-na) — の名称には、耕地所有者とシリアとのつながりが認め

られる。エル神は言わずと知れたウガリットの神であり、シリアにはエル神の祭祀センターがないにもかかわらず人名要素として頻繁に見られる。もう一方の na は「玄武岩」を意味する語であり、この耕地名とは、グデアがニンギルス神殿建設のために玄武岩 (na⁴, na) を調達した地域、すなわち「メスア山麓のウマヌムから、そしてマルトゥ (の) 山麓のバサラから大きな na 石を運んだ」(Gudea Statue B vi 3-8) と建築碑文に表現



される地域のうち、前者か後者に因む名称であろう。そのうえ、ファラ語彙リストのなかで mar-tu と結びつく神名が、北メソポタミアやシリアで儀礼が捧げられる地母神⁴ Tu 女神であるから、マルトゥの由来は北メソポタミアかシリア方面に求められるだろう。

ファラ文書ではアスアグに mar-tu の肩書を付す文書は 1 例しかなく、しかもこの文書は舟運と関わる。文書に記された人名のなかに「神格化されたユーフラテス河」を含む人名があることから、ここでの舟運はユーフラテス河を利用していることが分かる。そしてまた、舟の列には羊の群れも積まれていた様子が間接的ながら窺われる。この文書に記される 140 名のうちのアスアグを含む一部は、河川輸送と羊の群れの移動に従事し、おそらくユーフラテス河中流域・上流域と南メソポタミアとをつなぐ働きをしていたと推測される。ビシュリ山の麓の交易都市マルトゥ市もそのような中流域にあった。

2. マルトゥ市? アバトゥム市?

マルトゥ市の位置を探るにあたりこの都市の特徴を確認しておきたい。そこには港があり、ワイン交易の中継地であった。商取引の権限を持つ長老の人数がほかの都市よりも多い様子は、水陸合わせて複数の交易ネットワークが集まる地点にあるのではないだろうか。しかもトウトゥルの高官がこの地でエブラと同盟を結んだのであるから、トウトゥル付近に違いない^(注3)。トウトゥルから数十キロ上流のあたりにはいくつかの遺跡があるが、規模の大きさからいえば Mansura にある Tell Thadiyēn であろう。しかしこの遺跡はすでにアストゥールによりアバトゥム (Abat(t)um) に同定されている (Astour 1992, 35-36, fn. 223)。

アバトゥムは古バビロニア期のベニヤミン人の都市であり、上記のエブラ文書にも *a-ba-tu(m)/ti*^{<ki>} の表記で見られる。アストゥールは、キャラバン (および廻行する舟) は 1 日に 25-30km の速度で進むと仮定したハッロ (W. W. Hallo) の考えに依拠し (Hallo 1964, 63)、マリからハラブへ向かうキャラバンの道程と日数に基づいてラスクム (Lasqum) からエマルまでの距離を割り出した。そのキャラバンはラスクムを通過してから 3 日間でエマルへ到着したという。ラスクムの位置付けに関するかれの論考を筆者はまだ確認できていないのだが (Astour 1987, 2)、おそらくかれはトウトゥル付近としたのだろう (デュラン (J.-M. Durand) はラスクムをハラビヤとする)。街道沿いにはたいいてい 1 日行程で宿場が設けられるものである。このあたりの 10 万分の 1 の地図 (ニューズレター No.6, p.10, 図 2) で見れば、トウトゥルの西約 30km のあたりに Tell Thadiyēn があり、そこからエマルまでは 60 km 強であるからちょうど 2 日間の行程である。このような計算からトウトゥル～エマル間は 3 日行程とい

うこととなる。また Tell Thadiyēn のある Mansura から南へ数キロ入ったところにパルミュラへ向かう街道の入り口があるので、この遺跡は水運と陸運の分岐点として重要な位置にあったと思われる^(注4)。アバトゥムを Tell Thadiyēn とする同定はその後コールマイヤー (K. Kohlmeyer) に支持され、いまではほとんどの研究者に受け入れられている (Astour 1992, 36, fn. 223)。昨年 11 月に開催された国際シンポジウムにおいてもシャルパン氏 (D. Charpin) がアバトゥム = Tell Thadiyēn を前提に話を進められた。

前 2 千年紀の Abat(t)um については、古バビロニア期マリの「アムル人王朝」創始者であるヤハドゥン・リム (Yahdun-Lim) がマリアにシャマシュ神殿を建立したさいの建築碑文のなかに、ベニヤミン人の王 Ayalum の都市としてアバトゥムに言及する。地中海東海岸まで遠征したことで名を馳せたヤハドゥン・リムは、碑文のなかで、その時の勝利を誇る章句につづけてベニヤミン人の反乱鎮圧についても叙述した。以下中田一郎氏による翻訳で該当箇所を紹介する。

「その年、サマヌム市とウブラブム国の王ラウム、トウトゥル市とアムナヌム国の王バフリ・クリム、アバトゥム市とラブム国の王アヤルムが彼 (ヤハドゥン・リム) に対して反乱を起こし、ヤムハドの王スエプフの軍隊が彼らの救援にきた。また、ヤミンの人々はサマヌムの町に集合したが、彼はヤミン人のこれらの王たちを負かしその軍隊と援軍を打ち破り、敗北させた。彼は彼らの死体を積み上げ彼らの城壁に火を放ち、廃墟にした。彼はハナ人の町ハマンを火で焼き、廃墟とした。彼はその王カ・ツリ・ハラを負かし、その国を併合し、ユーフラテス河流域を平定した。」(中田一郎訳 NHK 学園古代オリエント史講座必携 38-39 頁、「ヤハドゥン・リム碑文より」)

碑文の記載順で見れば、サマヌム (Samānum) はテルカ (Terqa) 領域^(?)、つぎのアムナヌム (Amnanum) については現在のラッカ付近とわかるので、ユーフラテス河を廻る順に記述しているように見える。それが正しいければ、Tell Thadiyēn をアバトゥムとするアストゥールの考えとは矛盾しない。ユーフラテス河・バリアフ河の合流地点西側にはいくつかの遺跡が点在し、そのなかでもっとも規模の大きなものが Tell Thadiyēn である。先にも述べたように、マルトゥ市もまたエマルの下流にあるユーフラテス河沿いの港湾都市で、しかもトウトゥル近くにある大型の都市であるはずだ。この条件を満たすとすれば Tell Thadiyēn のほかにはない。マルトゥ市が Tell Thadiyēn に同定されるべきと考える根拠はもう 1 点ある。エブラ文書で言及されるマルトゥ市とアバトゥム市を比較すれば、マルトゥ市のほうが圧倒的に人口が多く規模が大きい印象を受ける点である。

Abatum⁵ についての記述は現在のところ 9 枚のエブラ

行政経済文書に見られる。

a-ba-tum^{ki} *ARET* 1 1 rev. iii 2, *ARET* 3 167
ii 5, *ARET* 8 522 rev. iv 10; 526 xiv
28; 531 rev. ii 13 *ARET* 13 vii 4; ix
4; rev. [iii 2]; iii 22, TM.75.G.10033, I
MEE 7 44 viii 25.

a-ba-tim^{ki} *ARET* III 892 iv:2'.

このなかで注目すべき記述が2箇所ある。

[1] 「アバトゥムの監督ドゥビ (*Du-bi*₂) は、3種類の衣類1枚ずつと銀製のDIB¹個が(与えられた)。」

(TM.75.G.10033 I, *Archi* 1989 p.36.)

アバトゥムの監督がエブラから高級品を与えられているので、この都市はエブラの影響下にあったことは間違いない。しかしエブラが商取引をする相手は「都市の長老(*abba*₂)」であるにもかかわらず、ここにはその存在が認められない。「王(en)」がいた様子もない。高位の者として監督1人の名前が知られるだけでは、エブラ文書のころ(前2375~2350年)のアバトゥムが古バビロニア期のような大型の都市であったとは考えにくい。

いっぽうマルトゥ市について見てみれば、エブラ文書では30箇所以上の言及があり、王(en)と長老がいたことも明らかで、しかもエブラから長老へ贈られる衣類がエマルやハランのおよそ3倍の数にのぼるのである。マルトゥ市には長老の数が多く、ひいては人口も多かったと推測される。またエマルから数度にわたり神殿への捧げものがもたらされた事実は、この地が交通の要衝であり、また、エブラの当時の権力者 *Iburium* の息子 *Amuti* が LUGAL (最高位の行政職)として赴任したのであるから、政治的・外交的にも重要な都市であったろう。監督も少なくとも6人以上いた。かれらの名前もすべてエブラ文書に記されている。単純計算すればマルトゥ市は規模としてはアバトゥム市の3倍から6倍ちかくはあったのではないだろうか。

[2] 「衣類1枚と腰布1枚を Tub (地名) の人アハイシャル、(かれは) Tub でアバトゥムの人により捕らえられた⁽²⁾ (者)、(そのかれに) 与えられた。第2級の衣類1枚と美しい腰布1枚を Neniradu (地名) のダバ、(かれは) マルトゥ市で・[?]の者、に与えられた。」 (*ARET* 8 xiv 22- xv 6)。

ここではアバトゥムとマルトゥという地名がつづいて記されており、これによりアバトゥムとマルトゥは同時期に存在していたことが明らかとなる。ほかにも双方が別々の箇所に記された文書が1点ある。(*ARET* 8 531 vi 25) en 26) *mar-tu*^{ki}.... xiv 13) *lu*₂ *a-ba-tum*) .

Tell Thadiyēn についてはまだ十分な発掘調査がなされておらず、古バビロニア期以前についてはほとんど不明

と言って良いだろう。今後の発掘調査が待たれるのであるが、もし前3千年紀半ばにおいても大規模な遺跡であるなら、そこはむしろマルトゥ王国の中心都市 *Mar-tu/tum*^{ki} ではないかと筆者は考える。アストゥールによりアバトゥムと同定されはしたが、いずれにしろ Tell Thadiyēn から直接的な証拠が発見されることを期待する。

注1 ペッティナートは、エブラ文書内で en がいると認められる都市名/地名 81 を挙げ、これらを「王国 (kingdom)」とした (Pettinato 1991, 115-119)。

注2 本稿で地名として遺跡名の「ファラ」を用いる理由は、この地が古代都市シュルツパクであるよりも、各地の交易代理店が集まるいわば「交易センター」と考えられるからである。

注3 エブラ文書に見られるマルトゥ市については、拙稿「南メソポタミア都市文明に貢献したマルトゥ」『特定領域 若手研究者成果論集』(出版予定)を参照。

注4 マリ出土の書簡類に認められたキャラバンの行程については、国際シンポジウムでのシャルパン氏による詳細な説明が参考になる。

文献

(略号は The Assyrian Dictionary に準じる)

- Archi*, A. 1985 "Mardu in the Ebla Texts", *Orientalia* 54, 7-13.
- Archi*, A. 1989 "Imâr au III eme millénaire d' après les archives d' Ebla", *M.A.R.I.* VI, 21-38, p.36.
- Astour*, A. 1978 "The Rabbeans: A Tribal Society on the Euphrates from Yahdun-Lim to Julius Caesar", *Syro-Mesopotamian Studies* 2/1:1-121.
- Astour*, A. 1992 "An Outline of the History of Ebla (Part 1)", *Eblaitica* 4, Indiana.
- Hallo W. W. 1964 "The Road to Emar", *JCS* 18:57.
- Kohlmayer* K. 1984 "Euphrat-Survey: Der mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung durchgeführte archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal", *MDOG* 116:95-118.
- Kohlmayer* K. 1986 "Euphrat-Survey 1984. Zweiter Vorbericht über die...archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal", *MDOG* 118: 51-65.
- Pettinato*, G. 1991 *Ebla, A New Look at History*, Baltimore and London.

事務局だより

来る2月4日と5日に第6回シンポジウムが開催されます。このシンポジウムでは過去5年にわたる本研究領域全体の研究成果が発表されます。そして、シンポジウムの第1日目には総括班主催による外部評価が実施され、本研究領域の5年間の研究成果に関する評価を受けることになります。

2月14日から3月30日にかけては、総括的調査と補足的調査を内容とする第14次現地調査が実施されます。この調査では西秋班、藤井班、常木班、石田班が合流します。

残るわずかな期間の研究は今後の継続研究のありかたを決定します。来る3月末で研究は一応の収束をみることとなりますが、今後の継続研究のありかたをみすえて連携しましょう。

(大沼克彦)

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.17 2010年1月30日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴 1-1-1 国士舘大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

裏表紙写真 南から見たテル・シャップート1号丘ケルン墓主体部。上方（北）にテル・ガーネム・アル・アリ遺跡が見える。

